

M.ブローグ

新 版

経済理論の歴史 II

古典学派の革命

杉原四郎／宮崎犀一 訳

ECONOMIC
THEORY IN
RETROSPECT

Mark Blaug

東洋経済新報社

M. ブローグ

新版 經濟理論の歴史

II

古典学派の革命

杉原四郎 訳
宮崎犀一

東洋經濟新報社

訳者紹介

すぎはら しろう

杉原四郎 甲南大学教授

みやざき いち

宮崎犀一 東京女子大学教授

新版 経済理論の歴史(Ⅱ)(全4巻)

定価 3500 円

昭和59年2月16日 発行

訳者 杉原四郎／宮崎犀一

発行者 高柳 弘

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3033-3266-5214

Printed in Japan

凡 例

一 これは、M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, Third edition, Cambridge University Press, 1978 の全訳であるが、I 巻（第一章―第五章）、II 巻（第六章―第八章）、III 巻（第九章―第十一章）、IV 巻（第十二章―第十六章）と四冊に分かれたのは、もっぱら出版上の都合による。

二 II 巻の訳者は、杉原・宮崎の二人であるが、その分担はつぎのとおりである。

第六章―第七章（杉原）

第八章（宮崎）

三 「本文」はできるだけ読みやすくという趣旨から原語をいっさいいれなかったが、どうしても必要と思われる場合には、ルビをもつてこれにかえた。

四 「文献案内」は逆にできるだけ原語表示によったが、そのさい洋雑誌については、別掲「文献略語表」による表示法を採用した。

五 「文献案内」中、著者がそれに言及しているがその文献名を明示していないもの等については、訳注によって補った。しかし、刊行年以後にリプリントされたもの等については、当該文献のすぐあとに「」をいれて補った。

六 「本文」および「文献案内」の両者を通じて、掲載文献中邦訳のあるものについては、そのうちの適当なものを必要に応じて当該文献のすぐあとに「」をいれて補った。

七 「本文」および「文献案内」のいずれにおいても、著者の考え違いや著者による引用違い等は、訳注で処理した。ただし明らかなミスプリントは、無断で訂正しておいた。

八 以上の訳注は*をつけ、これに対して原注は章別の通し番号をつけ、いずれもブラグラフの終りに挿入した。
 九 なお「本文」中の・は「」とし、イタリックは書名にかぎり『』に、その他強意の場合にはゴチック体とした。

数学記号表（出現順）

M	=貨幣ストック	ED_n	=貨幣への超過需要
V	=期間中の M の回転数	ES_{n-1}	=商品の超過供給
T	=期間当りの取引額	λ	=任意の正の定数
P	=期間中の平均価格水準	m	=同次関数の次数
X_i	=産業あるいは部門の年産出	κ	=総取引量の割合としての現金残高需要
a_{ij}	=投入-産出係数	M_i	=活動的貨幣残高への取引需要
Y	=貨幣所得	M_p	=不活動的貨幣残高への予備的需要
N	=労働者数	M_s	=不活動的貨幣残高への投機的需要
W	=総貨幣賃金	S	=計画貯蓄
w	=貨幣賃金率	I	= ΔK = 計画投資
r	=利潤率あるいは利子率	s'	=平均貯蓄性向
p_i	=貨幣価格	z	=資本・産出増分比率
t	=時間	G	=所得の現実成長率
$\bar{W}$	=総実質賃金	G_w	=所得の「適正」成長率
$\bar{w}$	=実質賃金率	G_n	=所得の「自然」成長率
K	=物的資本のストック	g_a	=投資の現実成長率
$\bar{R}$	=土地の総実質地代	g_w	=貯蓄の「保証」成長率
π	=総実質利潤	u	=奢侈財と労働サービスに支出される実質賃金総額の割合
π	=総貨幣利潤	ω	=平均収入関数の弾力性あるいは需要の価格弾力性
AP	=要因の平均生産物	AR	=生産物の平均収入
MP	=要因の限界生産物	MR	=生産物の限界収入
ϵ	=生産関数の弾力性		
η	=平均生産物関数の弾力性		
D_i	=財およびサービスの需要		
S_i	=財およびサービスの供給		
D_n	=貨幣需要		
S_n	=貨幣供給		
ED_{n-1}	=商品への超過需要		

c_i	= 「不変資本」	MVP	= 限界価値生産物
v_i	= 「可変資本」	MRP	= 限界収入生産物
k_i	= $c_i + v_i$	A	= 総要因生産性
$t_{c,v}$	= 「不変および可変資本」の 回転率	α	= 労働に関する生産関数の弾 力性
$d_{c,v}$	= 「不変および可変資本」の 耐久性	β	= 資本に関する生産関数の弾 力性
C	= 固定資産プラス原料ストック	$\bar{n}$	= 資本単位当りの実質賃貸料
V	= 運転資本	n	= 資本単位当りの貨幣賃貸料
s	= 「剰余価値」	MRS	= 限界代替率
σ	= 期間当りの「剰余価値率」	AVC	= 平均可変費用
q	= 「資本の有機的構成」	ATC	= 平均総費用
Q	= 資本 - 労働比率	MC	= 限界費用
o_i	= マルクスにおける部門の産 出	Φ	= 要因間の代替の弾力性
t_r	= 原料の回転率	TC	= 総費用
t_f	= 固定資産の回転率	TR	= 総収入
s_v	= 労働に支出された「剰余価 値」の割合	Ψ	= 総費用の弾力性
s_c	= 消費財に支出された「剰余 価値」の割合	AC	= 平均費用
s_k	= 資本財に支出された「剰余 価値」の割合	r	= 平均費用の弾力性
$\bar{s}$	= 可処分「剰余価値」	θ	= 平均生産期間
$\bar{v}$	= 「可変資本」マイナス俸給	PV	= 将来所得の流れの現在価値
e'	= 「地代の率」	i	= 内部収益率
U	= 総効用	Y^e	= 稼得所得
MU	= 限界効用	Y^d	= 可処分所得
MU_n	= 貨幣の限界効用	Y_p	= 計画所得
MU_e	= 支出の限界効用	Y_r	= 実現所得
MFC	= 限界要因費用	H	= 保蔵
AFC	= 平均要因費用	L_1	= $M_t + M_p$
		L_2	= M_i

文 献 略 語 表

- AAPSS** – *Annals of the American Academy of Political and Social Science*
AER – *American Economic Review*
BJPS – *British Journal for the Philosophy of Science*
BNGR – *Banca Nazionale del Lavoro Quarterly Review*
CJE – *Canadian Journal of Economics*
CJEPS – *Canadian Journal of Economics and Political Science*
DET – *The Development of Economic Thought*, ed. H.W. Spiegel (1952)
Ec – *Economica*
Ecom – *Econometrica*
EEH – *Explorations in Entrepreneurial History*
EET – *Essays in Economic Theory*, ed. J.J. Spengler, W.R. Allen (1960)
EH – *Economic History*
EHR – *Economic History Review*
EI – *Economia Internazionale*
EJ – *Economic Journal*
EJS – *European Journal of Sociology*
EMD – *Evolution of Modern Demand Theory*, eds. R.B. Ekelund Jr.,
 E.G. Furubotn, W.R. Gramm
ER – *Economic Record*
ES – *Economy and Society*
ESS – *Encyclopedia of the Social Sciences*
ET – *Economisk Tidskrift*
ETHA – *Economic Thought: A Historical Anthology*, ed. J.A. Gherity (1965)
HOPE – *History of Political Economy*
IEP – *International Economic Papers*
IESS – *International Encyclopedia of the Social Sciences*, ed. D.L. Sills
 (1968)
ISSB – *International Social Science Bulletin*
JB – *Journal of Business*
JEH – *Journal of Economic History*
JEI – *Journal of Economic Issues*
JEL – *Journal of Economic Literature*

- JHI* – *Journal of the History of Ideas*
JLE – *Journal of Law and Economics*
JMCB – *Journal of Money, Credit and Banking*
JNS – *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*
JPE – *Journal of Political Economy*
JPUE – *Journal of Public Economics*
JWH – *Journal of World History*
KYK – *Kyklos*
MeEc – *Metroeconomica*
MME – *Marx and Modern Economics*, ed. D. Horowitz (1968)
MS – *Manchester School of Economics and Social Studies*
OEP – *Oxford Economic Papers*
PAPS – *Proceedings of the American Philosophical Society*
PDPE – *Dictionary of Political Economy*, ed. R.I. Palgrave
PS – *Population Studies*
QJE – *Quarterly Journal of Economics*
REA – *Readings in Economic Analysis*, ed. R.V. Clemence (1950)
REP – *Revue d'économie politique*
REStat – *Review of Economics and Statistics*
REStud – *Review of Economic Studies*
RHET – *Readings in the History of Economic Thought*, ed. I.H. Rima (1970)
RPE – *Revista di Politica Economica*
RSE – *Review of Social Economy*
SAJE – *South African Journal of Economics*
SEHR – *Scandinavian Economic History Review*
SEJ – *Southern Economic Journal*
SJPE – *Scottish Journal of Political Economy*
SQ – *Southwestern Social Science Quarterly*
SR – *Social Research*
SS – *Science and Society*
SVZ – *Schweizerische Zeitschrift für Volkswirtschaft*
UT – *Utility Theory. A Book of Readings*, ed. A.N. Page (1968)
WA – *Weltwirtschaftliches Archiv*
WEJ – *Western Economic Journal*
WP – *World Politics*
YBESR – *Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research*
ZN – *Zeitschrift für Nationalökonomie*

総目次

序 章 経済理論は進歩したか

第一章 スミス以前の経済学

第二章 アダム・スミス

第三章 人口、収益漸減および地代

第四章 リカードの体系

第五章 セー法則と古典派貨幣理論

(以上、I巻)

第六章 ジョン・ステュアート・ミル

第七章 マルクス経済学

第八章 限界革命

(以上、II巻)

第九章 マーシャル経済学——効用と需要

第一〇章 マーシャル経済学——費用と供給

第一章 限界生産力と要因価格

(以上、Ⅲ巻)

第二章 オーストリア的資本・利子理論

第三章 一般均衡と厚生経済学

第四章 貨幣・利子および物価に関する新古典派理論

第五章 ケインズ派経済学

第一六章 方法論的あとがき

人名索引

事項索引

(以上、Ⅳ巻)

目 次（Ⅱ巻）

凡 例

数学記号表

文献略語表

第六章 ジョン・ステュアート・ミル

『経済学原理』への読書案内……………100

生産と分配の諸法則 (三〇〇)	生産的労働の学説 (三三〇)	資本の理論 (三〇四)	賃
金基金説 (三〇六)	前払い経済学と同時化経済学 (三三三)	機械の問題 (三二四)	生
産要因の成長率 (三二六)	社会主義 (三二六)	慣習と分配法則 (三二六)	諸種の分配
分 (三三〇)	利子の節欲理論 (三三三)	価値論 (三三六)	貨幣数量説 (三三二)
イン	フレーション (三三三)	貸付基金説 (三三四)	イン
派の論争 (三三五)	真正手形学説 (三三七)	セー法則 (三三四)	通貨学派と銀行学
国際価値論 (三四〇)	国際的な賃金水準と価格水準 (三四五)	通貨管理に関するミルの立場 (三三九)	
トランスファー支払い (三四七)	剰余はけ口学説 (三四〇)	ヒュームの法則 (三四六)	
静態論と動態論 (三五三)	低下する利潤率 (三四四)	国際貿易理論の基礎 (三五二)	
租税の帰着 (三五七)	公債 (三五九)	定常状態 (三五六)	課税 (三五七)
	政府活動の範囲 (三五九)	古典派経済学における	

る教育 (三六〇) 古典派経済学者と工場法 (三六二) 経済学者としてのジョン・ステュ
アート・ミル (三六六)

文献案内

第七章 マルクス経済学

術語 (三七七) 価値と剰余価値 (三七九) 大きな矛盾 (三八二) 転形問題 (三八二)
転形問題の解決法 (三八五) 歴史的転形 (三九〇) 価値はなんの役にたつか (三九五)
労働価値論に対するマルクス主義の立場 (三九六) 不労所得としての利潤 (四〇〇) マ
ルクスとベームーバヴェルク (四〇五) 剰余価値と経済剰余 (四〇六) 資本主義の運動
法則 (四〇九) 利潤率低下の法則 (四一〇) 資料の一瞥 (四一七) 資本節約的革新
(四二一) 再生産表式 (四二九) 景気循環 (四三三) 投資関数 (四三四) 労働節約偏重
の神話 (四三六) 労働者階級の窮乏化 (四四〇) 経済的帝国主義 (四四三) 制度的仮説
の役割 (四四一)

『資本論』への読書案内

価値 (四五五) 社会的必要労働 (四五六) 商品の物神崇拜 (四五八) 貨幣論 (四五〇)
剰余価値 (四五〇) 工場法 (四五二) マルクスの史料の使用 (四五四) 分業と機械 (四五五)
剰余価値と労働生産性 (四五七) 資本蓄積 (四五七) 絶対的ならびに相対的窮乏化 (四五九)
本源的蓄積 (四六〇) 分配費用 (四六〇) 資本の回転 (四六二) 再生産表式 (四六四)
大いなる矛盾 (四六四) 転形問題 (四六六) 利潤率低下の法則 (四六九) 資本節約的
革新 (四七二) 外国貿易 (四七二) 景気循環 (四七三) 貨幣と利子 (四七四) 地代論
(四七七) 経済学者としてのマルクス (四七九)

文献案内

第八章 限 界 革 命 四九三

1 限界効用の発現——絶対的説明か相対的説明か—— 四九三

新しい出発 (四九四) 極大化原理 (四九七) 価値と分配 (四九八) 限界効用理論の起

源 (五〇〇) 多発的発見? (五〇七) 革命はいつ革命なのか? (五二〇) 緩やかな上

り坂の戦い (五二三)

2 ジェヴォンズ 五〇六

交換理論 (五〇七) 双務的交換と競争的交換 (五二九) 連鎖 (五三三) 労働の非効用

(五三三) 正または負の傾斜の労働供給曲線 (五三五) 資本理論 (五三七)

3 他の先駆者たち 五〇八

利潤の極大化についてのクールノー (五三九) 複占理論 (五四〇) チューネンの限界生

産力理論 (五三二) デュピュイとゴッセン (五三四)

文献案内 五三七

第六章 ジョン・ステュアート・ミル

ミルの『経済学原理』の第七版は、一九世紀の後半期すべてを通じて、争う余地なく経済学者たちのバイブルであった。一八九〇年代になると、英語を話す諸国においては、マーシャルの研究がミルの座をゆるがしはしめたが、ミルの著作は一九〇〇年までは、依然として英米両国の大学の初級課程における基本的な教科書であった。本書が異常にない耐久性をもった主たる原因は、そのなかに古典派的要素と反古典派的要素とが混在しているということであった。本書がリカードの学説とリカードに対する批判によって導入された多くの限定や洗練との最終的な総合を示すものであることは、リカード的な考え方と主観価値論とを和解させるための、資本の「実質費用」や価格決定における需要の役割をほのめかすだけで十分であろう。本書が経済学という主題のほとんどすべての部門を包括的にとりあげていることが、経済学の文献のなかでの独自の地位をそれに与えた。そして本書の格調の高さと文体の優雅さが、その權威をさらに強化したのである。

それは読みやすい書物である。実際読みやすすぎるぐらいだ。議論のはこび方がいかにも流暢なので、読者は知らぬ間に容易に納得させられてしまう。書物全体に絶大な自信があふれており、ある特定の問題についてミルが不確かである場合——そういう場合のあったことが今では彼のケーンズとの私信によって知られている——でさえ、彼は本書が理論的な疑問におかされることを許していない。異なった方向のアプローチから引き出された違った考え方が、あえて統一しようとされぬままに共存をみとめられている。ミルはのちにみるように分析のうえでの獨創性を要

求しても十分是認されるであらうのに、そうすることを故意にさせている。本書のねらいはたんに、彼が序文で述べているように、「現代のいっそう拡大した知識と進歩した思想とに適合した」ような『国富論』の最新版を書くことであつた。本書の副題は、抽象的な諸原理を「その社会哲学への適用」との関連において取り扱おうとする彼の意図を表わしている。そして彼は理論的な諸問題を軽視はしていないが、本書の調子は、ミルが分析のための分析のこまかいせんさくはそれほど重くみていないことをたくみに示唆している。

だがその理論的折衷性にもかかわらず、あるいはまさにそのためにこそ、ミルの『原理』は古典派理論の全体に目を通す最良の機会を与えてくれる。ベイリーの『価値の本性に関する批判的論考』（一八二五）〔鈴木鴻一郎訳〕リカブド価値論の批判』（一九四一）、ロングフィールドの『経済学講義』（一八三四）、およびシーニョアの『経済科学綱要』（一八三六）〔高橋誠一郎・浜田恒一訳〕『経済学』（一九二九）のほうに、ミルより読んでいっそうおもしろい。だがそれらがとりあげているのは問題領域の一部だけであつて、古典派経済学が実際問題に適用される場合の妙味をつたえるには不適當なのだ。そしてその点をおさえておかないと「限界革命」がなぜ一八七〇年代までひきのばされたかを理解することがむずかしくなる。一九世紀の前半期の著述家たちの思想がその後半期の「新しい経済学」の創設者たちにつたえられたのは、よかれあしかれ基本的にはミルの定式化によつてであつた。

『経済学原理』への読書案内

生産と分配の諸法則

本書の冒頭の「緒言」は単刀直入に重商主義の非難を始め、それを、経済関係の「実体」を強調する「貨幣は貨幣としてはどんな欲望をもみたまない」という一句でむすんでいる。貨幣万能論をたたかうとする執心のあまり、ミル

は貨幣の価値保蔵機能をわすれている。もっとも本書の他の個所では彼はこのことに十分気づいているが。富（所得と読め）は市場で売買されるすべての財の総体であると定義され、サービスがそれに含まれるかどうかという問題は、第一編第三章までもちこされる。つぎに古代以降の経済発展の簡単なスケッチがあり、それから有名な、技術的条件によって与えられる生産の法則と、「人間の諸制度」と「社会の法と習慣」とによって支配される分配の法則との区別へ移っていく。この区別によってミルが示そうとすることは、生産要因の価格決定——機能的分配——が生産の技術的諸条件とは独立であるということではなくて、「社会の三大階級」への所得の人的分配は、それ自身歴史的変遷の産物である財産の分配によって影響されるということである。生産の法則は「物理的真理の性格」をおびているから、それについてどうこうするのは全く不可能である。だが分配の法則は、人間の決定にしたがうものであり、私有財産制のもとでさえ変更することが可能である。この区別はミルの考え方の主要な支柱の一つとなつて、リカードとマルサスの思想を、彼自身の広範な諸改革案と調和させるのに役立った。

厳密に解釈すれば、二種類の法則の間のこの区別は支持しえない。なぜならそれは、ケーキのサイズを決定する諸力がそのスライスを支配する諸力から独立であることを意味するからである。だがゆるやかにうけとるなら、それが言うところは、生産の能率に関する命題は分配の平等に関する命題とは異なつた仕方で正当性をもつということにはかならない。おそらくそれは、実証経済学と規範経済学を区別し、「事実」の問題と「当為」の問題とを分離しようとする旧式のやり方ではなからうか。問題はすべて、このような区別が個々のケースに実際どのように適用されるかということにかかっている。ミルが主題を「生産」と「分配」の二つに分け、それぞれを第一編と第二編で取り扱ったことは、二種類の法則の区別が受けいれられる場合でさえ、依然として問題として残されよう。生産と分配を論じたのちに第三編で価値の問題を扱うことで、彼は、分配は歴史的偶然的産物なのだから価値評価とは無関係なのだと